様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　３ 年　６ 月 ３０ 日現在

機関番号：３２６３５
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2020
課題番号：１８Ｋ００００６４

研究課題名（和文）近代仏教学は「トランスナショナル」なのかー皇道仏教・戦時教学に関する基礎的研究ー

研究課題名（英文）Has Modern Buddhist Studies been Transnational?

研究代表者
三浦　周（MIURA, SHU）

大正大学・仏教学部・非常勤講師

研究者番号：６０６４６２２２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,900,000円

研究成果の概要（和文）：近代仏教学の形成と展開は「言語と人種」問題に紐づく。国民国家的言語イデオロギーが梵語学修の環境、即ち研究インフラとしての大学を整備した。これは国語統一運動を推進した上田万年と近代仏教学のオピニオンリーダーとなった高楠順次郎の関係にあらわれる。ただし、大学における近代仏教学は伝統的な「教」との齟齬を生じさせた。これを統合したのが皇道仏教・戦時教学である。ここで国家と仏教の接点は聖徳太子に求められた。こうした同質化は修養を目的とする仏教青年会の活動に顕著である。同質化が可能であったのは、研究室、ひいては大学が無機的な研究インフラではなく有機的な研究共同体と認識されていたことによる。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究は、近代仏教研究がトランスナショナル・ヒストリーという方法論によってトランジションする前段階として、近代仏教の歴史事象をナショナル・ヒストリーとして定位するものである。戦前/戦後を断絶としてみると皇道仏教・戦時教学は正しく対象化されない。これをはかる指標が戦後の新たな価値に基づくことによる。そこで、本研究では、戦前/戦後に共通する研究インフラとしての大学に注目した。これは検証可能な「制度」であることによる。通時的視点による全体像の提示は、単一文化主義の確認ではなく、多文化主義、あるいはポスト多文化主義の理解に資するものである。

研究成果の概要（英文）：Modern Buddhist Studies in Japan was shaped by Aryanism. Language ideology has created an academic environment for Sanskrit in universities. This is based on the relationship between Ueda Kazutoshi, who promoted the unification of the Japanese language, and Takakusu Junjiro, who became an opinion leader in modern Buddhist studies. However, modern Buddhist studies in universities contradicted traditional doctrines. This contradiction was resolved by Imperial Buddhism and wartime doctrines. Imperial Japan and Buddhism were connected by Prince Shotoku. Such homogenization was evident in the Young Buddhist Association. This homogenization was possible because the university was grasped from the organism theory.

研究分野：近代仏教

キーワード：近代仏教学　護法論　皇道仏教　戦時教学　新仏教　仏教青年会　聖徳太子　梵語

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

（1）2000 年以降、「近代仏教」の再解釈が試行される近代仏教研究では、往々にしてトランスナショナル・ヒストリーという視座が採られる。これは、オリエンタリズム・ポストコロニアリズムといった問題意識をもったうえでのナショナル・ヒストリーの超克といった方法論であり、「近代仏教」の複合的な歴史事象を相対的に捉える点は確かに有効である。しかしながら、先行する歴史学では、超克すべきナショナル・ヒストリーを前提とする「トランスナショナル化された歴史」への批判的考察が同時進行している。これを踏まえて近代仏教研究を眺めるならば、個別の歴史事象の研究は進展したが、それらがナショナル・ヒストリーとして定位されているとは言い難い。近代仏教研究では「トランスナショナル化された歴史」がどこに向かうのかが、より切実な課題として浮かびあがる。

（2）本研究では、「近代仏教」の個別の歴史事象を眺める際に、それらに共通する動機として「護法」を想定している。これは 2000 年以前の研究（特に柏原・池田・吉田ら）において、仏教近代化の阻害要因と評価されている。しかし、近代仏教史を（日本仏教）自身が（日本の）ナショナル・アイデンティティと異ならないことを証明しようとした歴史とみるならば、近代仏教の個別の歴史事象はすべて護法から演繹され得る。こうした流れの極点にあるのが皇道仏教・戦時教学といえる。ただし、この皇道仏教・戦時教学もまたただしく対象化されているとはいい難い。たとえば、『禅と戦争』（ブライアン・アンドレー・ヴィクトリア、2015 ）にみられるように、「護法」が捨象されると皇道仏教・戦時教学は「本来の仏教」からの逸脱とされるが、この「本来の仏教」像こそオリエンタリズムによって紡がれた幻想だといえる。

２．研究の目的

（1）19 世紀ヨーロッパにおけるオリエンタル・ルネサンスというムーブメントから生じた「言語と人種」という問題は、極めてナショナルな問題として展開した。それが 20 世紀＝「戦争の世紀」を招来したのは周知のとおりである。日本の近代仏教学の形成と展開も、この問題系に紐づくと仮定した際、その始点は梵語学、極点は皇道仏教・戦時教学に比定されるであろう。故に、本研究では、この始点・極点におけるナショナリティの検証を目的に置いた。

（2）ナショナリティの検証というと、主に「思想」が重視され、特定の個人を対象化しつつ、戦前／戦後を断絶とみるわけであるが、本研究ではこれを通時的に把握するために、ナショナリティ検証のための指標をインフラストラクチャーとしての「大学」とした。近代的な空間である「大学」において、近代仏教学が「制度」として如何に準備されたか。これを歴史公文書・学事資料等から実証する点に目的を置いた。

３．研究の方法

上記の目的に沿って、以下の調査項目を立てた。

1 上田万年の博言学構想（近代日本における梵語の位相）、2（梵語学修を相対化するための）外国語学修環境、3（1,2 の例外として）上田恭輔の人物調査、4（「天皇」と仏教の接点としての）近代における聖徳太子の位相、5 大正大学の梵文学研究室（1926～1996）、6（皇道仏教・戦時教学の受け皿としての）仏教青年会

４．研究成果

（1）本研究で資料整理・調査をおこなった対象は以下である。

1 上田万年の博言学構想（近代日本における梵語の位相）を上田と高楠順次郎の関係を中心に以下の資料から調査した。

内村鑑三『独立短言』（警醒社 1912）/「仏教徒国民同盟会員集会状況報告書」（早稲田大学・古典籍総合データベース）/『大谷大学百年史』通史編（大谷大学 2001）/南條文雄『懐旧録』（大雄閣 1927）/『東京帝国大学五十年史』上・下（東京帝国大学 1932）/上田万年『国語のため』（平凡社 2011）/保科孝一「故上田先生を語る」『近代作家追悼文集成』18(ゆまに書房 1987) /円地文子「おやじ・上田万年」『日本近代随筆選』3（岩波書店 2016）/金子亨「Uëda Mannen のこと」『千葉大学ユーラシア言語文化論講座』4、2001/清水康行「上田万年の欧州留学に関する記録」『日本女子大学紀要』文学部 61、2012/安田敏郎「「帝国大学言語学」の射程」『立命館言語文化研究』16、2005/山川知子「欧州評議会・言語政策部門の活動成果と今後の課題 –plurilingualism 概念のもつ可能性」『ヨーロッパ研究』7、2008/長田俊樹『新インド学』（角川書店 2002）/加藤重広『言語学講義–その起源と未来』（筑摩書房 2019）/『雪頂・高楠順次郎の研究』(武蔵野女子大学・仏教文化研究所 1979)/『東京外国語学校一覧』明治 14 年、35 年、37 年、39 年、41 年、43 年、45 年、大正 2～15 年、昭和 2～11 年/『日本帝国文部省年報』第三(文部省 1875)/ 宮永孝『日本洋学史』（三修社 2004）/片岡啓「「印哲」は何を目指してきたのか？」『南アジア研究』20、2008 等。

2 外国語学修環境。「仏教興隆」が成ったとされた昭和 9 年（1934）を中心に旧制大学の『一覧』

（総覧・要覧等、大学史含む）を調査。該当年がない場合は近い年度の類似資料を調査した。
『東京帝国大学要覧』、『京都帝国大学一覧』、『東北帝国大学一覧』、『九州帝国大学一覧』、『北海道帝国大学一覧』、『京城帝国大学一覧』、『台北帝国大学一覧』、『大阪帝国大学一覧』、『名古屋帝国大学一覧』（昭和 14 年）、『大阪医科大学一覧』（昭和２年）、『慶應義塾大学総覧』（昭和 8 年）、『早稲田大学一覧』（昭和 12 年）、『東京商科大学一覧』、『明治大学一覧』（昭和 10 年）、『法政大学校友名鑑』（昭和 16 年）、『学員名簿付中央大学要覧』、『日本大学一覧』（昭和 10 年）、『國學院大學一覧』、『同志社大学一覧』（昭和 10 年）、『東京慈恵会医科大学一覧』、『京都府立医科大学一覧』（昭和 10 年）、『新潟医科大学一覧』、『岡山医科大学一覧』、『旅順工科大学一覧』、『満洲医科大学一覧』、『龍谷大学一覧』、『大谷大学要覧』、『専修大学百年史』、『立教大学一覧』、『立命館大学要覧』（昭和 7 年）、『関西大学創立五十年史』（昭和 11 年）、『拓殖大学一覧』、『千葉医科大学一覧』、『金沢医科大学一覧』、『長崎医科大学一覧』、『立正大学一覧』（昭和 7 年）、『駒澤大学一覧』（昭和 8 年）、『東京農業大学要覧』（昭和 10 年）、『日本医科大学一覧』、『高野山大学要覧』、『大正大学一覧』、『大阪商科大学一覧』（昭和 5 年）、『東洋大学一覧』、『上智大学五十年史』（昭和 2 年）、『東京工業大学一覧』、『大阪工業大学一覧』（昭和 7 年）、『東京文理科大学一覧』、『廣島文理科大学・廣島高等師範学校・元第二臨時教員養成所一覧』、『神戸商業大学一覧』、『関西学院一覧』（昭和 10 年）、『藤原工業大学概要』（昭和 14 年）、『創立四拾週年東亜同文書院記念誌』（昭和 15 年）、『神宮皇學館一覧』（昭和 14 年）等。
3 南條文雄に次ぎ高楠順次郎に先行して梵語学をアメリカ・コーネル大学で学修した上田恭輔（1871～1951）の人物調査を行った。参考とした資料は以下である。
JACAR（アジア歴史資料センター）Ref. C09121990300 明治 37 年自 2 月至 5 月「大日記」副臨人号、自第 1 号至第 212 号共 4 冊「2 月 8 日上田恭輔通訳採用方移牒」（防衛省防衛研究所）/上田恭輔『鶏肋集』第 5 編国語中の梵語の研究（大同館 1922）/ Barreiro, Elena. Frederick Roehrig: A forgotten name in Salish linguistics. Northwest Journal of Linguistics 6.3,2012 等。
4 近代における聖徳太子の位相について、聖徳太子像の変遷を以下の資料から調査した。
加藤玄智『神道の宗教学的新研究』（大鐙閣 1922）/岩橋遵成『日本儒教概説』（東京宝文館 1925）/徳鳳「護法小策」、徳重浅吉『明治仏教全集』第 8 巻（春陽堂 1935） /境野哲『聖徳太子伝』（丙午出版 1917）/高島米峰『聖徳太子と逆臣馬子』（丙午出版 1920）/三浦周行『現代史観』（古今書院 1922）/高島米峰『信ずる力』（明治書院 1936）/浅野研真『聖徳太子と社会事業』（仏教社会学院出版部 1937）/暁烏敏『神道・仏道・皇道・臣道を聖徳太子十七条憲法によりて語る』（香草舎 1937）/藤田徳太郎『新国学論』（大同印書館 1941）/ 「本学綱領」（大正大学 1941）/高島米峰『聖徳太子正伝』（明治書院 1948）等。
5 大正大学の梵文学研究室（1926～1996）について以下の資料から調査した。
『大正大学五十年略史』（1976）/『大正大学一覧』昭和 4 年、5 年、8 年～14 年、16 年/『大正大學々報』1～38 輯（1927～52）/『大正大学学報』1～70 号（1953～95）/『大正大学ニュース』No.1～25（1972～79）/『大正大学学内報』No.1～16（1974～78）/大正大学学事資料/大正大学綜合佛教研究所内資料/梵文学研究室内資料「梵文学（聖語学・仏教学第二・印度仏教）研究室便覧」等。
6 仏教青年会については『仏教青年会調査表』（全日本仏教青年会連盟 1934）/『学内団体一覧』（文部省教学局 1940）によって概観し、補足的に以下の資料を調査した。
『代議士政党壮士各団体人名簿』（1891）/大正大学学事資料/『青年仏教叢書』（東京帝大仏教青年会 1935～45）『妹尾義郎日記』全 7 巻（国書刊行会 1974～75）/明石博隆・松浦総三編『昭和特高弾圧史』全 8 巻（太平出版社 1975）/『Dhamma』（大正大学仏教青年会 1976）/『汎太平洋仏教青年会大会関係資料』全 2 巻（不二出版 2016）/『全日本仏教青年会連盟機関誌『青年仏徒』』全 2 巻（不二出版 2018）
（2）3,4,6 については調査・研究を継続する必要がある。1 東京帝国大学出身ではない高楠順次郎が金田一京助（アイヌ学）、伊波普猷（沖縄学）らと並んで、梵語学・印度哲学のオピニオンリーダーとなるのは、上田万年の博言学構想（日本語を定位するための周辺諸語との比較研究）による。上田と高楠の履歴/評価にはかなりの類似点（国語調査委員会委員・帝国学士院会員・東京外国語学校校長等/学問領域の体系化・後進の育成）が認められる点を確認した。2 昭和 9 年（1935）の旧制大学（予科含む）における外国語科目はのべ 19 言語であり、ここで梵語関連の講座・科目がみられる大学は、東京帝国大学・京都帝国大学・東北帝国大学・九州帝国大学・慶應義塾大学・早稲田大学・日本大学・同志社大学・龍谷大学・大谷大学・立教大学・立正大学・駒澤大学・高野山大学・大正大学・東洋大学である。また、ラテン語・ギリシャ語・サンスクリット語・パーリ語の科目を、旧制大学とこれを前身校とする現代の大学とで比較すると、1935:ラテン語 17 校、ギリシャ語 14 校、サンスクリット語 16 校、パーリ語 9 校、2018:ラテン語 37 校、ギリシャ語 35 校、サンスクリット語 23 校、パーリ語 14 校となる。この有意差を国民国家的言語イデオロギーが梵語の学修環境に与える影響として分析した。5 大正大学の梵文学研究室の変遷（名称/主任・副主任/助手・副手）を確認した。また、戦前・戦後・現代を通じて、課外授業が「伝統」とされる点、研究室独自で遷化者追悼会が実施されている点などから、「研究室」とは無機的な研究インフラではなく有機的な研究共同体であると分析した。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計1件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 三浦周	４．巻 27
２．論文標題 近代における仏教青年会運動の射程ー〈青年〉および〈新仏教〉概念ー	５．発行年 2019年
３．雑誌名 佛教文化学会紀要	６．最初と最後の頁 327-356
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計7件（うち招待講演　3件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 三浦周
２．発表標題 「新仏教」概念の射程
３．学会等名 近代仏教史研究会
４．発表年 2019年

１．発表者名 三浦周
２．発表標題 日本文化の重層性　近代における読み替え・語り直し
３．学会等名 宮城教区智山青年会（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 三浦周
２．発表標題 プレ近代思想としてみる排仏論・護法論　聖徳太子論の変遷を中心に
３．学会等名 蓮花寺佛教研究所
４．発表年 2019年

１．発表者名 三浦周
２．発表標題 近代仏教における「聖徳太子」の位相
３．学会等名 佛教文化学会
４．発表年 2019年

１．発表者名 三浦周
２．発表標題 「新仏教」概念の一考察
３．学会等名 佛教文化学会
４．発表年 2018年

１．発表者名 三浦周
２．発表標題 排耶論研究の過去と現在
３．学会等名 東北大学国際文化研究科国際日本研究講座公開講演（招待講演）
４．発表年 2018年

１．発表者名 三浦周
２．発表標題 排耶論からみる日本仏教の近代化
３．学会等名 智山青年連合会講習会（招待講演）
４．発表年 2019年

〔図書〕　計1件

1．著者名 オリオン・クラウタウ,ミシェル・モール,三浦周,師茂樹,岡田正彦,箕輪顕量,ライアン・ワルド,渡辺健哉,池田智文,林淳	4．発行年 2021年
2．出版社 法藏館	5．総ページ数 370
3．書名 村上専精と日本近代仏教	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

6．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	吉澤　秀知 (Yoshizawa Hidetoshi)	大正大学・仏教学科・非常勤講師 (32635)	

7．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

8．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関